

艦砲射撃から80年

未来へ紡ぐ平和のかたち

忘れてはいけない日。7月14日と8月9日。
釜石は、本州で唯一2度の艦砲射撃を受けたまちです。
今回の特集では、戦争を体験した人が減少する中、改めて釜石で起きた
艦砲射撃や平和のあり方を振り返り、この出来事を未来へ伝えていくため、
私たちに何ができるかを考えます。

釜石にあった連合軍捕虜収容所

釜石には仙台捕虜収容所第4分所（大橋）、第5分所（釜石）が設置されており、アメリカやイギリス、オランダなどの捕虜達は製鉄所や鉱山での労働に従事していました。彼らのうち33人が栄養失調や衰弱、病気により亡くなり、32人が艦砲射撃によって亡くなっています。写真は第4分所（大橋）



偵察に来ていた連合軍

この写真は昭和20年6月29日、当市が受けた1回目の艦砲射撃の前にアメリカ軍によって釜石の上空から撮影されたものです。いかに用意周到に計画が練られ、攻撃されたものかが分かります。



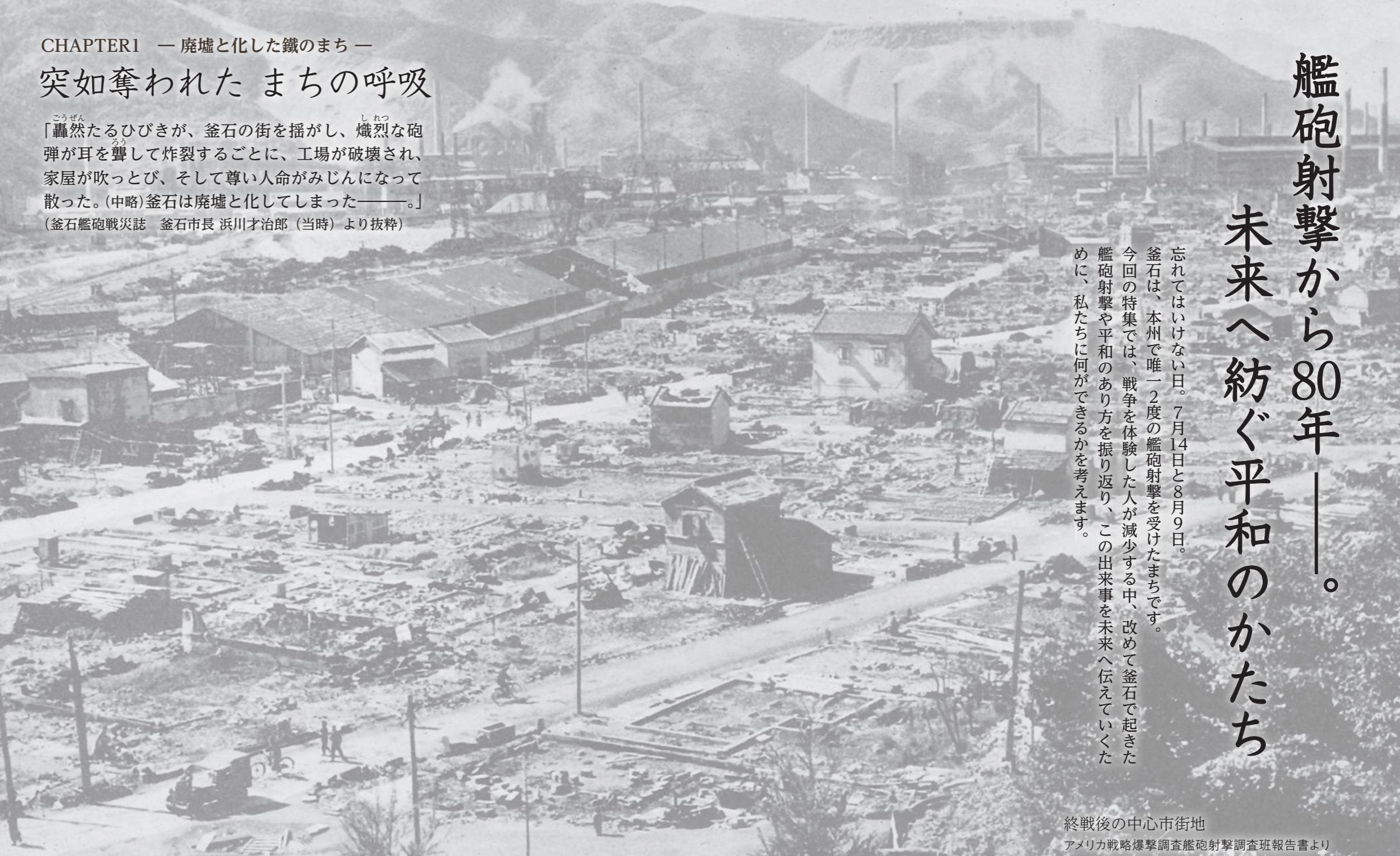
▲米国国立公文書館所蔵 米軍撮影空中写真



▲艦砲射撃前の中心市街地

CHAPTER1 — 廃墟と化した鐵のまち — 突如奪われたまちの呼吸

「轟然たるひびきが、釜石の街を揺がし、熾烈な砲弾が耳を聾して炸裂するごとに、工場が破壊され、家屋が吹っ飛び、そして尊い人命がみじんになって散った。(中略) 釜石は廃墟と化してしまった——。」
(釜石艦砲戦災誌 釜石市長 浜川才治郎(当時)より抜粋)



終戦後の中心市街地

アメリカ戦略爆撃調査艦砲射撃調査班報告書より

被弾数 (発)

	16インチ	8インチ	5インチ	計
7月14日	802	728	1,035	2,565
8月9日	803	1,392	586	2,781
計	1,605	2,120	1,621	5,346

※8月9日、イギリス艦隊の使用砲弾数は不明

建物・人的被害 (戸/人)

	全焼	半焼・一部焼	全壊	半壊・一部壊	死亡
7月14日	1,460	18	163	878	431
8月9日	1,470	19	117	195	283
軍関係・捕虜					68
計	2,930	37	280	1,073	782

特集コンテンツ

- CHAPTER1 廃墟と化した鐵のまち
- CHAPTER2 体験者の声
- CHAPTER3 伝えるという選択

CHAPTER2 体験者の声

いま 現在だから語る私たちの記憶

未来へと託す平和への願い

望み続けた平和

終戦で感じた一筋の光



渡邊 佐一さん (89)



▲艦砲射撃前の中心市街地

悪い記憶は忘れようと、艦砲の記憶にはずっと蓋をし、あまり多くを語らずに生きてきました。ただ、東日本大震災を経験し、「津波は逃げることができるが、戦争は自分で命を守ることができない」ということを感じ、私の記憶を伝えようと思います。

私が戦争を体験したのは小学校4年の時でした。当時は、今の鳥谷坂トンネルを上つていったところに監視所があつて、週に2回ほど兵隊に水を届けに行っていました。その日は朝から警戒警報が出ていたので、届けに行かなくともいい日でしたが、友達と一緒に水を届けに行きました。すると、兵隊から「今から戦争が始まるから早く帰れ」と言われ、海側に目をやると三貫島の近くに艦隊が見えました。「戦争

はどこか遠くでやっているもの」と思っていたので、それを見たときは足がすくみました。その後、空襲警報のサイレンが鳴り響くと同時に、空母から1機の戦闘機が飛び立ち、市内すれば飛んできて、市役所（現在の只越復興住宅1号棟付近）に焼夷弾を落としていきました。それが合図のように艦砲射撃が始まりました。あちらこちらから上がった火や煙がまちに広がり、状況が見えなくなる中、山道を駅方面に走っていくと、製鉄所の煙突が崩れ落ちていくのを見ました。やっと攻撃が止んで山から下りると、まちは焼け野原になつていて、立ち尽くしました。

8月9日は、家を直すために使う釘を焼け跡から拾つていたのを覚えています。

8月15日。終戦の知らせをラジオで聞き、微かな光を感じたような気がしました。

戦争で感じた言い表せられない負の感情は、絶対に経験してほしくありません。昨日挨拶をしていた人が次の日には殺し合ひをすることがあるのが戦争です。殺した側、殺された側、どちらも辛い思いをする。世界中で戦争が無くなることを祈っています。

思い出したくない記憶。消し去りたい記憶。

それでも次の世代に伝えることが意味を持つと信じて――。

今日は実際に艦砲射撃を体験した2人にお話を伺うことができました。話から見えたのは、年月が経っても消すことのできない当時の鮮烈な記憶。体験者の声から2度の艦砲射撃の状況や平和への想いに迫ります。

静かに灯った光を胸に

戦争のない明日へ、声を残して

このお話をるのは、これが本当に最後だと思っています。
7月14日の5時頃、警戒警報が鳴って、看護師として働いていた私は、製鉄所病院（現在のマイヤ釜石店付近）に走りました。正午間近、敵機襲来の一報で、病院の敷地内にある防空壕へ50人以上の患者さんを避難させました。もう、無我夢中でした。

「ビューン！ ガーン！ ドーン！」鼓膜が破れそうな音が響き、海上からの砲撃が2時間くらい続出する、震えながら防空壕の中で耐えました。本当に惨めで、怖くて、今でもその音が耳に残っています。恐る恐る防空壕から出ると、鈴子町から大渡町が見渡せるほどで、散乱する死体も目になりました。

3日後、ようやく家に戻ると、母と再会でき、「死んだと思ってたよ」と泣きながら抱きしめられ、私は涙が止まりませんでした。でも「また艦砲射撃が来るかもしれません」、という不安が、心のどこかにずっとありました。患者さんの治療に使ったガーゼを川で洗つて干していたとき、機銃掃射に襲われ、命がけで走りました。本当に怖かったです。そういうことが1週間も続きました。そして8月9日、本当にまた艦砲射撃が来ました。生き地獄でした。

終戦の知らせを聞いたとき、心にぱつと明かりが灯つた気がしました。「これで、本当に終わつたんだ」と静かに実感しました。同時に、今までの生活を、

もう一度取り戻すために、自分にできることをやろうと決意しました。看護の仕事を続けながら、23歳で助産師の資格を取りました。元気に生まれてくる子どもたちを、しっかりと迎えられるように、寝る間を惜しんで勉強し、必死に知識と技術を身につけました。戦争の記憶は、決して消えることはありません。今でも、あります。戦争は人災です。人の手で起くるものは、人の力で防ぐことができます。絶対に戦争はしてはいけません。人を思ひやり、助け合う心を忘れずにいなければ平和が来る」と親から言われ「平和」というものをよく知らぬまま望み続けてきました。

8月15日。終戦の知らせをラジオで聞き、微かな光を感じたような気がしました。

戦争で感じた言い表せられない負の感情は、絶対に経験してほしくありません。昨日挨拶をしていた人が次の日には殺し合ひをすることがあるのが戦争です。殺した側、殺された側、どちらも辛い思いをする。世界中で戦争が無くなることを祈っています。



佐々木 郁子さん (95)



▲艦砲射撃前の製鉄所病院



平和を考えることが
地域の魅力化につながると信じて

釜石高校3年
佐藤 涼汰郎さん

地域の皆さんに戦争の歴史を伝えると同時に、自分たちの学びも深まりました。戦後80年の節目で終わらせるのではなく、ツアー内容を本格化し、地域に根づくイベントとして続いていってほしいです。若い世代が、釜石の戦争の歴史を積極的に学び、継承していくことが重要だと思います。釜石が平和教育の拠点になるよう、自分たちが中心となり若い世代に伝えています。



①小川防空壕跡で、事前に学んだ体験者の声を引用し当時の状況を伝える ②嬉石隧道避難口で、体験者の声を引用し当時の状況を伝える ③薬師公園で高校生の説明に耳を傾け、高校生と対話する参加者



戦時中、釜石の捕虜収容所で生活していたオランダ人、エヴェルト・ヴィレム・リンダイヤさんの孫にあたるエローイ・リンダイヤさん

収容中の祖父が、音信不通の中で、家族に宛てた日記形式の手紙を書くことは、希望を持ち続けるための大切な手段でした。

祖母は亡くなる前、私の父に「日本の人々に対して憎しみを抱いたり、復讐を望んだりしてはならない。それは悲しみを長引かせ、新たな戦争

を生むだけだから」と言いました。

私が釜石に来た理由は、戦争の恐ろしさを忘れないだけでなく、勇気と人間性を持ち、平和を深く願うことで、暗闇に立ち向かった人を讀めるためです。犠牲者への追悼と国同士の和解がずっと続くことを願っています。

エローイ・リンダイヤさん

調べて、聞いて、伝えた
忘れてはいけない、釜石の戦争の歴史



釜石高校3年
中澤 大河さん

僕はこのバスツアーを企画するまで、釜石の戦争の歴史をあまり知りませんでした。学校では、戦争よりも震災の勉強を重点的にやっていたので、僕と同じような人は多いと思います。だからこそ、皆さんにも釜石の戦争の歴史について知ってほしいと思い、活動を始めました。バスツアーでは、参加者が知らなかったことに反応してくれたり、逆に教えてくれたりしたので、より一層学びが深りました。

釜石高校のゼミ活動で「地域の魅力化」をテーマに取り組む中で、釜石に残る戦争の歴史を発信することが、地域への理解と平和意識の向上につながるのでないかと考え、市内の戦跡を巡るバスツアーを企画した中澤さんと佐藤さん。釜石は、二度の艦砲射撃を受けたまちであり、当時、捕虜収容所があったことなどから、被害と加害の両面から平和を考えることができる貴重な場所だと考えました。そして7月21日、参加者20人を乗せたバスが、まちに残る戦争の記憶をたどりました。

バスツアーでは、参加型にこだわり、参加者が実際に五感で当時の様子を感じられるようにコースを工夫しました。さらに、普段あまり知られていない嬉石隧道避難口は、住宅街の一角に残る戦跡であり、戦争を道避難口は、住宅街の一角に残る戦跡であり、戦争を語り継ぐ声 受け継ぐ想い

CHAPTER3 —伝えるという選択—

世代を超えて
語り継ぐ声 受け継ぐ想い

艦砲射撃を題材とした紙芝居の読み聞かせを行う颶・2000のメンバー



被害者としてだけでなく、当事者として「戦争を起こしてはいけない」という視点を子どもたちには持つてほしいです。親の世代でも艦砲射撃の話題が出にくくなり、東日本大震災を経た今、戦争の記憶はさらに薄れています。だからこそ、今、伝えることが大切です。子どもたちだけでなく、親世代にも釜石の戦争の事実を知って欲しいと思います。

颶・2000
千葉 愛子さん

「戦争の記憶を風化させず、次世代へどう伝えていくか」自らの足で戦跡を巡る高校生、紙芝居で子どもたちに語りかける人、そして異国から訪れた人の眼差し。世代を超えて、伝えることにより合う人たちの声を届けます。

戦争を語る声が少しづつ遠のいていく今。

あの出来事を「知らない」で終わらせず、
このまちが歩んできた80年を、今一度見つめ直し
未来へと継承していくために、この特集を作成しました。

今、私たちは考えます。

記憶を受け取り、語り継ぐことは、
未来を守る力になるということ。

そして、今を生きる私たちの責任だということ。

毎日の平和も豊かさも決して当たり前ではありません。
今日という日を、何気ない日常として過ごせること。

それがどれほどの犠牲と、どれほどの祈りの上にあるのかを、
私たちは忘れずにいたいと願っています。

祈るだけではなく、忘れず、語り、受け継ぐこと。

それが、今を生きる私たちにできる、
たしかな平和のかたちであると信じて――。

